日本体育大学紀要 36 巻 1 号 (2006) 77-88

[原　著]

ユース年代における日・韓のサッカー指導者の資質に関する比較研究

李　宇 韺*・西 條 修 光**

(2006 年 5 月 8 日受付，2006 年 7 月 4 日受理)

The Comparative Study of Youth Soccer Coach's Potential between Japan and Korea

Woo Young LEE and Osamitsu SAIJO

The purpose of this study is obtain basic information for improvement in coaching skills and effective coaching styles, by comparing the coaches' potential in Japan and Korea. The sample of this study is total of 1,942 players; 1,388 players who belong to Japanese Football Association type 1 and type 2 high school (1,039 players, age 16.4±1.19 on average) and college (299 players, age 19.8±1.05 on average), and on 604 players who belong to high school (419 players, age 16.4±2.45 on average) and college (185 players, age 19.5±1.88 on average) in Korea Football Association. The coaches' potential is measured by collecting a survey made up of four categories consisted by 40 items, which are "coaching skills," "coaching styles," "communication skills," and "ability to motivate and give confidence to their players." These categories are identified by confirmatory factor analysis in Study1. Each categories are scaled in five levels by likert scale

The results are summarized as follows:

1. By looking at the results for the coaches teaching junior high school players, Korea had advantages in all four categories.
2. At the high school ages, Korea had advantages in "coaching skills" and "ability to motivate and give confidence to their players."
3. Comparing the group of results that marked high results group, Korean coaches had advantages in "coaching skills," "coaching styles," "communication skills," and Japanese coaches had an advantage in "ability to motivate and give confidence to their players."

From the results above, it is suggested that youth soccer coaches in Korea are superior in technical coaching skills, and coaches in Japan are superior in skills to motivate their players. The background facts that seem to be affecting these results are the differences in their reinforcement system, especially in the activities in school clubs.

Key words: Youth soccer players, Comparison between Korea and Japan, coach, Potential, Exploratory factor analysis

キーワード: ユースサッカー選手，日韓比較，指導者，資質，探索的因子分析

I. 緒　言

サッカー競技において，選手の競技力向上には中学・高校年代の指導が重要であると言われている[8, 15, 16, 20]。加藤ら[8]は，その国のサッカー競技の

* 大学院博士後期課程トレーニング科学系，** 体育心理学研究室

トップに位置する代表チームが世界のトップレベルにある国のほとんどが，ユース年代においてもトップレベルであり，代表チームのサッカーが確実に低年齢層に浸透していることを，強さの要因の一つとして挙げている。世界で成功しているサッカー強国はユース年代の強化を徹底し，様々なシステムやプログラムなどを投入して自分たちの国に合った方策を実践しているといえる。それが，代表チームの強化へとつながり，その国のサッカースタイルが，ワールドカップや世界レベルの大会で通用するようになり，世界で活躍できるような選手を育てることになると考えられる。

日本サッカー協会[14~16]は，世界トップクラスの国々のいずれもがその国のサッカー協会が主体性を発揮し，常に世界のサッカーの動向に意識を払い，強化・育成に関して一つの考え方を示し，それぞれの国に見合った手法を用いて，ユース年代からの一貫した強化・育成を強力に推進していると分析している。さらにこの年代の指導には，指導者の能力も大きな影響を及ぼすことから，指導者養成も欠かせない強化ポイントになるといえる。

加藤[8]と大嶋[20]は，日本と韓国は昔からスポーツが学校教育のもとで発展してきたことや，環境的，地理的，民族的，身体的に類似点が多い国であるが，サッカースタイルは異なるところが多いと述べている。両国のサッカースタイルを比較することで互いに良い影響を及ぼし合えるにもかかわらず，ユース年代の指導者の資質について比較した研究は見受けられない。アジアのサッカー強国として日本と韓国のサッカー指導者に着目して比較研究することは，日・韓のサッカー競技レベル向上に重要な意味を持つものである。

II. 目　　的

ユース年代における指導者の養成と一貫した指導は，その国独自のサッカースタイルの確立や選手の競技力向上のためには欠かせないものである。そのためには，この年代での実際に指導にあたっている指導者のリーダーシップを明らかにすることが必要である。

リーダーシップについて，Blanchard, K. H. & Hersey, P.[3] は，「組織と個人の共通的な目標を達成するために集団あるいは組織内のある構成員が別の構成員に影響を与える行動」と定義し，リーダーシップは特定の類型組織，集団だけではなく，他人や集団の行動に影響を与えるすべての状況で発生し，目標達成のために指導者の役割が非常に重要であると述べている。スポーツにおける指導者の目的は，選手たちの競技力を極大化させることである。Rebish[22] は，成功した指導者は訓練だけでなく，競技力向上を目的とした指導（指示行動類型）と，チームの肯定的雰囲気をつくり出し，選手の要求に応じた指導（社会的支持行動類型）を示すとしている。そのなかで，選手は指導者の社会的支持行動類型を好み，指導者行動不一致度が低いほどチームはよい結果とつながり，指導者の行動類型がチーム成功の予測指標だと主張した。そして，ソン[23]はスポーツ集団は選手と指導者がチームとして構成されており，選手と指導者の相互関係により組織の効率性が極大化されると述べている。

リーダーシップのなかで，指導者にとって必要な資質やチームへの影響力に関する研究は，指導者側を調査対象とするものが多く[6,7]，実際に指導を受け，パフォーマンスを発揮し，結果を生み出す立場にある選手側からの国際的に比較したものはほとんどみられない。

指導場面において，指導者自身は確信を持って指導しているが，結果が伴わない場合は，選手に指導者のねらいが伝わっていないことが多い。また，すばらしい競技成績を残していても，中学あるいは高校で競技をやめてしまうドロップアウトやバーンアウトなどには，指導者の指導に何らかの問題が少なからずあると思われる。湯浅[24]は，選手が指導者の目指すサッカーが納得できるものかどうかの評価だけでなく，「この人はどんな人なのだろうか」と指導者の知識レベル，マネージメント能力，選手たちへのアプローチの仕方，基本的な姿勢，そして人間性などを注意深く観察していると述べている。したがって，選手が指導者に対してどのようなとらえ方をしているのかを把握することは，指導者自身の在り方，指導法等について検討することができ，選手および指導者の成長につながるものと考えられる。

近年，共分散構造分析法[注]により構造概念の妥当性や性質の確認・検証するための方法が開発されつつある。本研究では，探索的因子分析の結果を基本モデルとして，共分散構造分析による検証的因子分

析を行った。そこでの基本モデルをもとに，調査Iではサッカー指導者の資質に関する質問紙を作成し，調査IIでは日本と韓国のサッカー指導者の指導実態を比較分析し，指導方法の改善やより効率的な指導のための基礎的資料を得ることを目的とした。

III. 調　査　I

1. 目的

調査Iでは，サッカー指導者の役割についての具体例を収集，集約し，サッカー指導者の資質に関する質問紙を作成し，その資質に関するモデルの妥当性の検証を目的とした。

2. 方法

1) 指導者の資質に関する質問紙の作成

質問紙の作成に当たって具体例の収集を行った。対象は日本サッカー協会に登録するJ大学スポーツ健康科学部の大学生4名と，日本サッカー協会公認B級コーチライセンスを所有する指導者1名である。具体例は日本サッカー協会が，2002年度B級コーチライセンス指導者講習会のテキストで，「コーチの役割」について述べている「コーチが持たなければならない技術と知識」に含まれているものや，リーダーシップスタイル[12]についての既研究を参考に，指導者として必要な資質に関する項目を記述させた。記述された項目について，日本サッカー協会公認B級コーチライセンス，および公認C級コーチライセンス所有者7名を含むサッカー指導者8名により200の項目に精選した。

2) 調査対象

日本サッカー協会に登録する高校生（479名）と，大学生（154名）の計633名（有効回答率63.3%），平均年齢は16.5±1.6歳であった。

3) 調査方法

作成された「指導者の資質に関する質問紙」を，日本サッカー協会1種，2種に登録するチームの指導者に郵送した。実施に際しては，各指導者が部員に直接配布し，集合法で行った。対象の高校生には中学時代，大学生には高校時代の指導者について回想し，質問項目に回答するように指示した。回答方法は5段階（「1: そうでない」〜「5: 必ずそうである」）で評定するように求めた。質問紙の回答の点数化に関しては，「1; そうでない」1点〜「5: 必ずそうである」5点を与えた。

4) 調査時期

2003年7月から9月までの期間に行った。

5) 調査内容

フェイスシート：調査対象者の基本情報として，所属チーム，性別，年齢，正選手・補欠選手別，競技経験年数，最高成績（全国大会ベスト8以上・全国大会出場・県大会ベスト8以上・県大会出場・その他）について，それぞれ自記式回答または，設定された回答肢のうち当てはまるものを選択させた。

6) 統計の処理

以下の統計処理に関しては，統計処理ソフト（SPSS 11.0J for Windows と Amos5.0）を用い，危険率5%未満をもって有意水準とした。

3. 結果

1) 探索的因子分析

サッカー指導者の資質の因子構造を明らかにするために因子分析を行った。すべての質問項目について回答の分布をみてゆがみのある項目を除き，残った項目を投入し，主因子法とプロマックス回転によって因子分析を行った。因子数については，3因子から5因子までの分析を行い，それぞれの結果を得たが，最適解は因子数を4にしたときであった。各因子の結果については，0.40以上の負荷量を持つ項目をもとに因子の解釈を試みた。また，4因子の内的整合性をみるためにクロンバックのα係数を算出したところ，0.818から0.952までの範囲であり，信頼性は十分あると判断された（表1）。

2) 因子の命名

第1因子の構成項目は「練習の種類をたくさん持っている」「サッカーの技術のレベルが高い」などの24項目であり，これらは専門的知識が含まれた現場での指導法に関する内容で「コーチング法」と命名した。

第2因子の構成項目は「選手の成長を第一に考えている」「サッカーだけではなく人間性も重視する」などの4項目であり，これらは目先の勝利より長期的な視線で指導する内容で「コーチングスタイル」と命名した。

第3因子の構成項目は「新しいことをする前には選手たちに賛成を得る」「チームの気まずい雰囲気

表1　探索的因子分析の結果

第1因子	コーチング法（24項目，α係数＝0.952） Q42.　私の指導者は，練習の種類をたくさん持っている Q25.　私の指導者は，サッカーの技術のレベルが高い Q23.　私の指導者は，アドバイスが適切で分かりやすい
第2因子	コーチングスタイル（4項目，α係数＝0.818） Q17.　私の指導者は，選手の成長を第一に考えている Q35.　私の指導者は，サッカーだけでなく人間性も重視する Q34.　私の指導者は，選手一人一人をよく観察してくれる
第3因子	コミュニケーションスキル（5項目，α係数＝0.886） Q43.　私の指導者は，新しいことをする前には選手たちの賛成を得る Q40.　私の指導者は，チーム内の気まずい雰囲気を解きほぐす Q22.　私の指導者は，選手の考えを尊重している
第4因子	選手のやる気，自信を高める能力（7項目，α係数＝0.840） Q10.　私の指導者は，その選手が好きか嫌いかでメンバーを決める Q 5.　私の指導者は，練習中も試合中も怒りっぽなしでいる Q32.　私の指導者は，その日の気分によって態度を変える

※各因子に記載している項目は，各因子負荷量の大きいものから3項目を選択した．

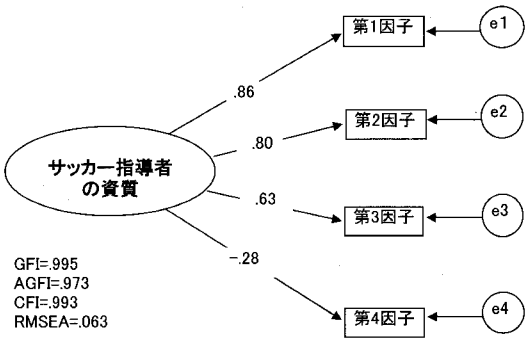

図1　サッカー指導者の資質についての検証的因子分析による因子モデル

を解きほぐす」などの5項目であり，これらは選手とのコミュニケーションに関する内容で「コミュニケーションスキル」と命名した。

第4因子の構成項目は「その選手が好きか嫌いかで，メンバーを決める」「練習中も試合中も怒りっぽなしである」などの7項目であり，これらは，指導者の言動や行動が選手の練習や試合に対する意欲にマイナスに作用する内容で「選手のやる気，自信を高める能力」と命名した。

3)　検証的因子分析モデル

探索的因子分析の結果をものにして総合得点についての4因子の基本モデルを作成した。モデルを検証するために，共分散構造分析による検証的因子分析を行った。基本モデルではRMSEAが0.08以下，GFI, AGFI, CFIは0.9以上となり適合度が満たされた（図1）。

4.　考察

探索的因子分析の結果，サッカー指導者の資質は4因子から成り立っており，その内容は「コーチング法」「コーチングスタイル」「コミュニケーションスキル」「選手のやる気，自信を高める能力」であった。

日本サッカー協会[17]はコーチの持つべき資質として，「オープンマインド」「情熱」「誠実さ」「忍耐」「論理的・分析的思考」「選手の学習過程に関する知識」「効果的指導の知識」「選手の自信ややる気を高める能力」の8つをあげている。基本モデルとサッカー協会のコーチの資質との関係をそれぞれの内容からみると，「コーチング法」は「論理的・分析的思考」「効果的指導の知識」「選手の学習過程に関する知識」を，「コーチングスタイル」は「情熱」「誠実さ」「忍耐」を，「コミュニケーションスキル」は「オープンマインド」を，「選手のやる気，自信を高める能力」は「誠実さ」「選手のやる気や自信を高める能力」を含んだ内容から成り立っていた。したがってこの基本モデルの内容的な妥当性はある程度満たされており，サッカー指導者の資質についてより信頼性のある質問紙が開発されたと考えられる。

IV. 調　査　II

1. 目的

調査IIでは，作成されたサッカー指導者の資質に関する質問紙を用いて，日本と韓国の中学・高等学校の指導者の資質ついて比較分析することを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象

日本サッカー協会に登録する高校生（1,039名，平均16.4±1.2歳）と，大学生（299名，平均19.8±1.1歳）の計1,338名（有効回答率62.5%），および韓国サッカー協会に登録する高校生（419名，平均16.4±2.5歳）と大学生（185名，平均19.5±1.9歳）の計604名，合計1,942名であった。

2) 調査方法

日本のデータについては，調査Iの結果をもとに作成された指導者の資質に関する質問紙を，日本サッカー協会に登録するチームの指導者に郵送した。実施に際しては各指導者が選手に直接配布し，集合法によって行った。その際，選手には高校生には中学時代，大学生には高校時代の指導者について回想し，回答するように指示した。

韓国のデータについては，調査者がそれぞれの高校および大学にて，監督の許可のもとに選手を一同に集め，説明，配布し，過去の指導者について回想し，回答するように求めた。なお，質問紙への回答はすべての対象者に対して作業制限法にて実施した。

3) 調査時期

2003年11月から2004年7月までの期間に行った。

4) 調査内容

フェイスシート：調査対象者の基本情報として，所属チーム，性別，年齢，正選手・補欠選手別，競技経験年数，最高成績(全国大会ベスト8以上・全国大会出場・県大会ベスト8以上・県大会出場・その他)について，それぞれ自記式回答または，設定された回答肢のうち当てはまるものを選択させた。

5) 指導者の資質に関する質問紙（添付資料：日本・韓国高校年代用）

質問紙は調査Iの結果をもとに作成され，4因子40項目からなっている。なお，各項目は5段階のリッカート尺度によって回答を求めた。

3. 結果

1) 日本と韓国の中学年代の指導者について（図2）

中学年代の指導者について因子ごとにt検定行った結果，第1因子「コーチング法」($t=14.83, p<.001$)，第2因子「コーチングスタイル」($t=5.21, p<.001$)，第3因子「コミュニケーションスキル」($t=7.38, p<.001$)，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」($t=8.79, p<.001$)のすべての因子について韓国の得点が有意に高い値を示した。

2) 日本と韓国の高校年代の指導者について（図3）

高校年代の指導者について因子ごとにt検定行った結果，第1因子「コーチング法」($t=3.15, p<.01$)，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」($t=3.97, p<.001$)については，韓国の得点が有意に高い値を示したが，第2因子「コーチングスタイル」，第3因子「コミュニケーションスキル」については，有意な差がみられなかった。

3) 日本と韓国の高成績群における中学年代の指導者について（図4）

高成績群の中学年代の指導者について因子ごとにt検定行った結果，第1因子「コーチング法」($t=10.95, p<.001$)，第2因子「コーチングスタイル」($t=5.23, p<.001$)，第3因子「コミュニケーションスキル」($t=7.13, p<.001$)については，韓国の得点が有意に高い値を示したが，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」($t=4.98, p<.001$)については，日本の得点が有意に高い値を示した。

4) 日本と韓国の高成績群における高校年代の指導者について（図5）

高成績群の高校年代の指導者について因子ごとにt検定行った結果，第1因子「コーチング法」($t=9.65, p<.001$)，第2因子「コーチングスタイル」($t=5.18, p<.001$)，第3因子「コミュニケーションスキル」($t=5.58, p<.001$)について韓国の得点が日本の得点より有意に高い値を示したが，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」($t=3.57, p<.001$)ついては，日本の得点が有意に高い値を示した。

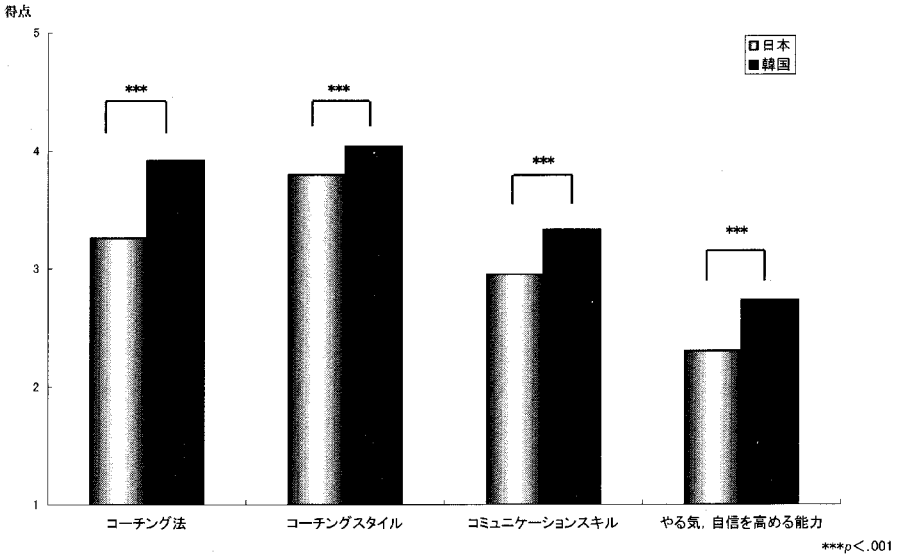

図２　中学年代における指導者の資質についての日・韓比較

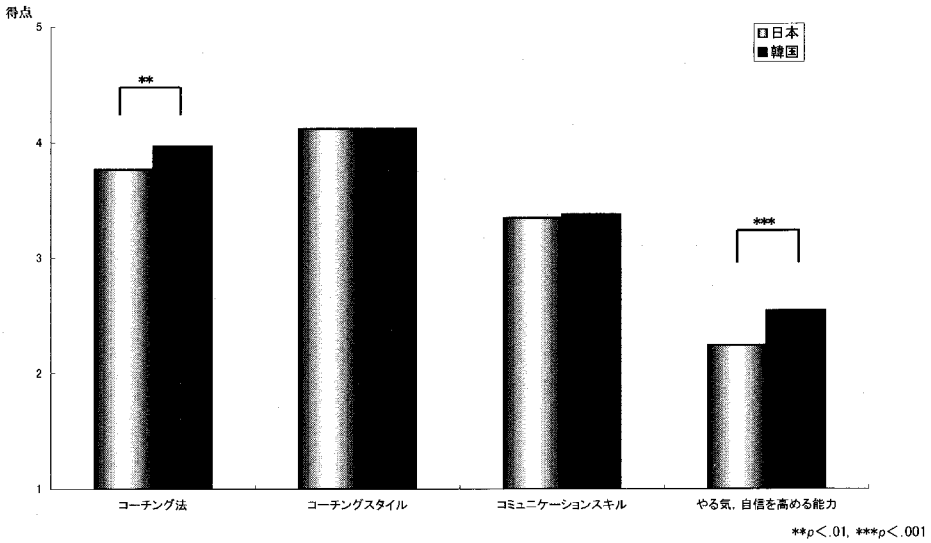

図３　高校年代における指導者の資質についての日・韓比較

4. 考察

1) 中学，高校年代における日本と韓国の指導者の資質について

ユース年代のおける選手の評価からみた指導者の資質を比較したところ，中学年代では第１因子「コーチング法」，第２因子「コーチングスタイル」，第３因子「コミュニケーションスキル」，第４因子「選手のやる気，自信を高める能力」のすべての因子で，韓国の方が日本よりも有意に優れていた。高校では第１因子と第４因子が韓国の方が有意に優れていた。各因子のなかで，「コーチング法」の因子が中学，高校年代いずれも有意に優れていたことが注目される。「コーチング法」の因子は，「サッカーの技術のレベルは高い」「トレーニングのデモンストレーションを自分で行える」などの，指導者のサッカーの技術にかかわるものである。この因子でみられた差は，日・韓のユース年代における強化システムの違いが反映されていると考える。

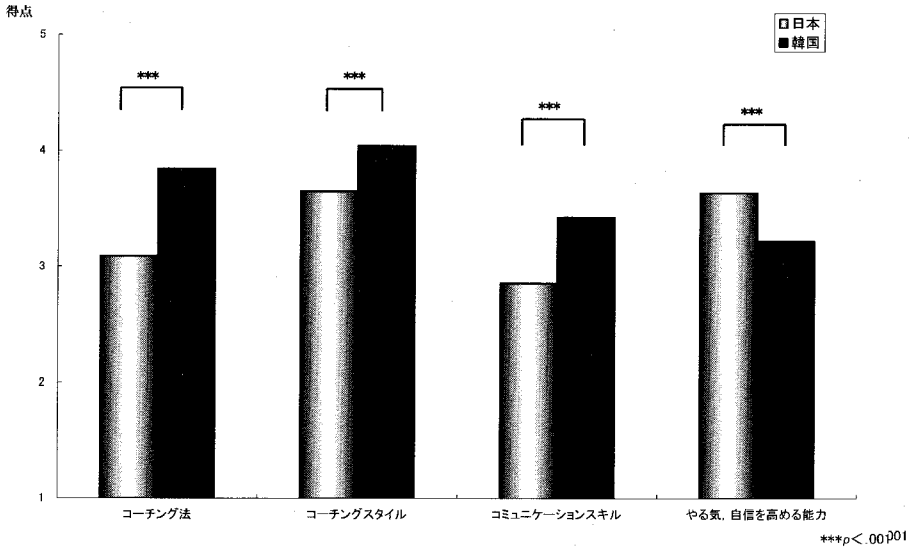

図4　高成績群の中学年代における日・韓比較

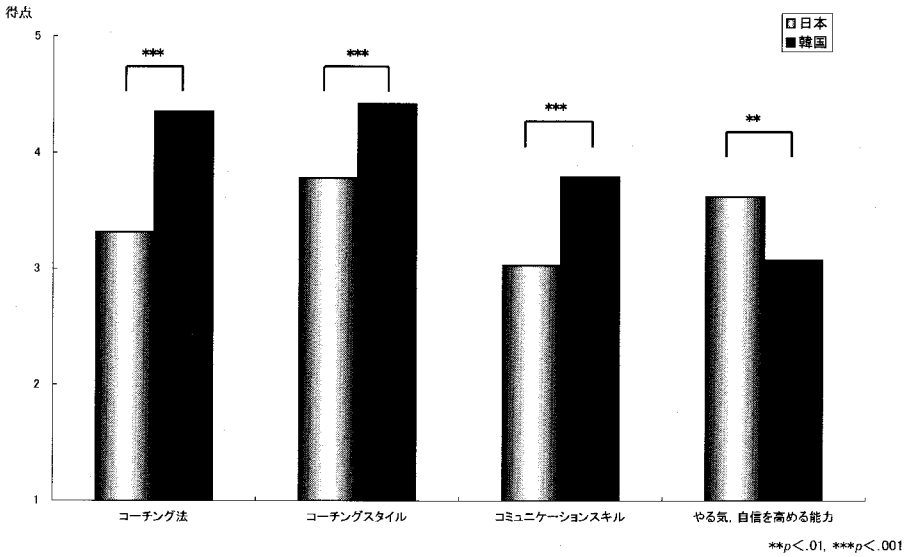

図5　高成績群の高校年代における日・韓比較

韓国においては，日本のようにクラブチームやJリーグの下部組織といった学校以外の育成組織がなく，学校教育の中でエリートサッカー選手を育成している。韓国の強化システムは，小学校を底辺として国の代表であるナショナルチームを頂点としたピラミッド型が形成されており，小学校・中学校・高校と進むにつれてチーム数が減少し，選び抜かれた選手のみが競技を続けているのが現状である。そのため，指導者もプロサッカー選手経験者が多く，専門的技術の指導とりわけサッカーの技術が長けている。

一方，日本サッカー協会は強化ビジョンとして「三位一体の強化策」を掲げ，その柱に「ユース年代の育成」[9] が掲げられているが，選手たちの指導者への評価は決して高いものとはいえない。日本では韓国と違って，生徒が学校での運動部活動に自由に参加し競技を行っているため，韓国より競技人口・チーム数共に多く，それに伴い指導者も多く必要と

なる。さらに，学校部活動の指導者は指導者ライセンスを所有していなくても指導をすることができるため，指導者の専門的技術指導に対する評価が韓国よりも低くなったのではと考えられる。

そして，日・韓における中学時代にみられた指導者の資質についての評価の差も，高校時代においては東川ら[4]，石井ら[5]が指摘するように，指導者が「種目の知識・理解」「計画・実行」などのサッカーの指導技術を身につけるとともに選手の評価も高くなり，「コーチングスタイル」「コミュニケーションスキル」の因子で両国間に差がみられなくなったものと考えられる。

2) 高成績群における日本と韓国の指導者について

阿部[1]は，日本の全国大会出場チームの指導者を対象に調査を行った結果，指導者の 98.1% が指導に携わっている競技の競技経験があり，そのうち，70.4% が全国大会出場以上の競技経験があることを報告している。このことから，高い競技成績を収めているチームの指導者は，指導者自身の競技レベルも高く専門的な指導ができていると考えられ，高成績群における日・韓の指導者の資質について比較した。

中学，高校年代をみると，1因子「コーチング法」，第2因子「コーチングスタイル」，第3因子「コミュニケーションスキル」においては韓国の方が有意に高く，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」においては日本の方が有意に高いことが示された。高成績群でみられた差は，考察の1でも述べたが，両国におけるユース年代での強化システムや運動部活動のあり方の差異よるものが大きいと考える。韓国の学校での運動部活動では，多くのプロサッカー経験者によって指導がなされており，サッカーのエリート教育を行える指導能力，さらには代表クラス選手を育てていくための技術，戦術を学校での指導教員が持っている。したがって，このようなシステムの下にある韓国の指導者は，高いレベルの競技経験があり，選手に劣らない技術を披露することができるためサッカーの専門的な指導，とくに「コーチング法」が高い評価となったと考えられる。

大嶽ら[21]は，競技レベルが高くなると選手は自己実現意欲が高くなり，技術のさらなる向上を求める特徴があると指摘している。このことから，高成績群では選手の自己実現意欲が高いため，日本での指導者の専門的技術に関する選手の評価が厳しくなったと推測される。また，日本での運動部活動は，高い水準の技能や記録に挑戦する中で，スポーツの楽しさや喜びを味わい，豊かな学校生活を経験する活動であり，勝つことのみを目指した活動にならないことに留意する必要がある[13]とされている。このことがサッカーの楽しさや，選手の自信を高めることを強調した指導者となり，その結果競技レベルの低い選手は満足できるが，競技レベルの高い選手には物足りなさが生じているとも考えられる。

第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」においては日本の方が有意に高かった。韓国のサッカーの強豪校では，練習時間や合宿の期間が長い，いわゆる「韓国式練習」がなされている学校が多く，先輩，後輩の関係が日本以上に厳しい[18]。日下ら[10]は韓国と日本の大学運動選手の生活価値観とスポーツ観をみた比較研究のなかで，慣習の厳守，自己主張の抑制，権威主義といった項目で韓国が高かったとしている。この先輩，後輩の関係の厳しさが運動部の活動では必要と感じている指導者が日本よりも韓国で多く，イー[11]は韓国では選手のモティベーションを高める指導が疎かなところがあると指摘している。

このような韓国の指導の在り方が，第4因子「選手のやる気，自信を高める能力」についての選手の評価を，日本よりも低くしたのではないかと考えられる。

V. 要　　約

本研究は，日本と韓国におけるサッカー指導者の資質を比較分析し，指導方法の改善やより効果的な指導のための基礎的資料を得ることを目的とした。

調査対象は，日本サッカー協会1種，2種に登録する高校生（1,039名，平均16.4±1.19歳）と大学生（299名，平均19.8±1.05歳）の計1,338名，および韓国サッカー協会に登録する高校生（419名，平均16.4±2.45歳）と大学生（185名，平均19.5±1.88歳）の計604名，合計1,942名であった。指導者の資質は調査Iで検証的因子分析を行い，そこでの基本モデルをもとに同定された，「コーチング法」「コーチングスタイル」「コミュニケーションスキ

ル」「選手のやる気，自信を高める能力」の4因子40項目からなる質問紙を作成することでみた。なお，各項目は5段階のリッカート尺度によって回答を求めた。

本研究の結果から以下のような結果が得られた。

1．中学年代の日本と韓国の指導者の資質について選手の評価をみたところ，「コーチング法」「コーチングスタイル」「コミュニケーションスキル」「選手のやる気，自信を高める能力」の4因子すべてにおいて韓国の方が有意に高かった。
2．高校年代をみたところ，「コーチング法」「選手のやる気，自信を高める能力」の因子で韓国の方が有意に高かった。
3．高成績群について中学，高校年代をみたところ，韓国の方が「コーチング法」「コーチングスタイル」「コミュニケーションスキル」の3因子が，日本の方が「選手のやる気，自信を高める能力」の因子が有意に高かった。

以上の結果から，ユース年代における韓国の指導者はサッカーの専門的技術が，日本の指導者は選手のモティベーションを高める技術が優れていることが示唆された。この背景には，両国間にある強化システム，とくに学校での運動部活動の在り方に違いのあることが考えられる。

謝　辞

本研究を進めるにあたって，いつも暖かく，親切なご指導を頂いた日本体育大学の円田善英先生，三宅信花助手，日本大学文理学部の大嶽真人先生に本当に感謝しております。そして，最後まで熱心にアドバイスをくださった日本体育大学院生の佐々木宏児さんにもいろいろお世話になり，感謝しております。また，調査にご協力いただいた日本サッカー協会，韓国サッカー協会の皆さん，両国のサッカー指導者，選手の皆さんに心から感謝を申し上げます。最後になりますが，韓国と日本で一生懸命サポートしてくれた妻，そして，家族にもこの場をお借りして，心より感謝を申し上げます。

注

共分散構造分析は，直接あるいは間接的に観測された現象に基づいて社会・自然現象の因果関係（原因とそれによって生じる結果との関係）を調べるための統計的手法である。現象の中でも，人の知能や各種の能力あるいは景気や経済力といったものは，直接測定できない。これらは「構造概念」と呼ばれ，これを表す変数を「潜在変数」と呼ぶ。共分散分析はこのような構造概念を含めた因果関係を分析するものである[25]。

参考・引用文献

1) 阿部征次：コーチングの効果的遂行の条件(1)―全国大会出場高校の指導者について―．東京女子体育大学紀要，**28**, 19–27 (1993).
2) Ball, J. R. & Carron, A. V.: The influence of team cohesion and participation motivation upon performance success in intercollegiate ice hockey. Canadian Journal of Applied Sport Sciences, **1**, 241–275 (1976).
3) Blanchard, K. H. & Hersey, P.: Management of organizational behavior. Prentice Hall, Englewood Cliffs, N.J. (1977).
4) 東川安雄，荒井貞光：選手と指導者の関係についての社会学的研究―特にジュニア選手から見た望みと現実の差を中心に―．1982年度日本体育協会スポーツ科学研究報告，No. 1, 130–133 (1983).
5) 石井源信，石川国広，高見和至，後藤　肇，猪俣公宏，岡田純一：ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究 (1)―指導者としての資質について―．日本体育学会第45回大会，516 (1994).
6) ジョン・ヨンリン，イ・ソンチョル（韓国）：コーチのリーダーシップと選手満足との関係．韓国スポーツ学会誌，**12**, 185–196 (1999).
7) カン・ジョング（韓国）：プロサッカー指導者のコーチング行動と集団凝集力との関係．韓国スポーツ学会誌，**12**, 161–170 (1999).
8) 加藤　久，田嶋幸三，小野　剛：日本サッカー協会強化指導方針1996年版，9，ジェイエプ・プランニング (1996).
9) 勝田　隆：知的コーチングのすすめ，5–6, 38, 136–137, 大修館書店 (2002)
10) 日下裕弘，夫　基源，西嶋尚彦：大学運動選手の生活価値観とスポーツ観に関する日韓比較研究．茨城大学教養部紀要，**25**, 383–394 (1993).
11) イー・ユソン（韓国）：韓国の卓球指導者たちの指導実態及び選手たちの指導者選好類型に関する研究．延世大学教育大学院体育教育学科，修士学位論文 (1999).
12) Lippitt, R.: Patterns of aggressive behavior in experimentally created social cli-

mates. Journal of Social Psychology (1933).
13) 文部省：高等学校学習指導要領解説（保健体育論，体育論），東山書房 (1999).
14) 日本サッカー協会：強化指導方針 1998 年版，ジェイエフ・プランニング (1998).
15) 日本サッカー協会：強化指導方針 2000 年版，ジェイエフ・プランニング (2000).
16) 日本サッカー協会，日本サッカーライダース協議会：最新サッカー百科大事典，大修館書店 (2002).
17) 日本サッカー協会：サッカー指導教本―フィールドプレーヤー編―，ジェイエフ・プランニング (2005).
18) ノ・ジュンユン（韓国）：日韓サッカー文化論，78–96, 講談社 (2002).
19) 小野　剛：クリエイティブサッカーコーチング，168, 大修館書店 (1998).
20) 大嶋裕史：日韓キックオフ伝説，190–191, 実業之日本社 (1996).
21) 大嶽真人，須田芳正，植田史生，石手　靖，依田珠江，古賀　初，田中博史：ジュニアユースサッカー選手の心理的競技能力について．慶応義塾大学体育研究所紀要，**42**(1), 1–7 (2003).
22) Rebish, L. J.: TheRelationship between Leadership, Cohesion, Motivation, and Success among Female Athletes. Unpublished M.S. Thesis, West Virginia University (1984).
23) ソン・カンハン（韓国）：高校サッカー指導者のリーダーシップ行動類型と選手満足度の関係．延世大学教育大学院，体育教育，修士学位論文 (2003).
24) 湯浅健二：戦うサッカー理論，232–244, 三交社 (1995).
25) 山本嘉一郎，小野寺孝義：Amos による共分散構造分析と解析事例，1，ナカニシヤ出版 (1999).

資料 1-1

高校時所属チーム	高校・クラブチーム	男・女	現在の年齢	才
高校時の最高成績	全国大会ベスト８以上・全国大会出場・県大会ベスト８以上・県大会出場・その他			
最高成績時の正・補	レギュラー・Ｂチーム（試合に出ない）	その時までの競技年数		年
高校時の指導者の年齢	２０代以下・３０代・４０代・５０代・６０代以上			
所属時のクラブの規模	１５人以下・１６人～３０人・３１人～５０人・５１人～８０人・８１人以上			

◆高校時代の指導者を思い浮かべて、以下の質問に答えて下さい。

★　無記名でのアンケートですので、素直な気持ちで答えて下さい。
★　質問には５段階で答えて下さい。（始めの３問は、３択です。該当するものに○をしてください。）
★　各質問には、考えすぎず、だいたいの感じで素早く答えて下さい。

1	私は、高校時代の指導者を	とても尊敬している	・尊敬している・	全く尊敬していない
2	私は、高校時代の指導者が	とても好きである	・好きである・	全く好きではない
3	私は、高校時代の指導者が	とても恐かった	・恐かった・	全く恐くなかった

		必ずそうである		どちらでもない		そうでない
4	私の指導者は、トレーニングの最初にテーマを与えてくれる	5	4	3	2	1
5	私の指導者は、練習中も試合中も怒りっぱなしである	5	4	3	2	1
6	私の指導者は、練習のやり方やこつを教えてくれる	5	4	3	2	1
7	私の指導者は、一人一人の選手にテクニックや戦術の指導をする	5	4	3	2	1
8	私の指導者は、身振り手振りを使って身体全体で指導する	5	4	3	2	1
9	私の指導者は、選手よりうまい	5	4	3	2	1
10	私の指導者は、その選手が好きか嫌いかで、メンバーを決める	5	4	3	2	1
11	私の指導者は、練習に工夫がある	5	4	3	2	1
12	私の指導者は、トレーニングのデモンストレーションを自分で行える	5	4	3	2	1
13	私の指導者は、トレーニング中一つ一つ丁寧に指導する	5	4	3	2	1
14	私の指導者は、新しいアイディアを試みる	5	4	3	2	1
15	私の指導者は、指導上の重要な問題について選手に意見を求める	5	4	3	2	1
16	私の指導者は、試合の反省を明確にしてくれる	5	4	3	2	1
17	私の指導者は、選手の成長を第一に考えている	5	4	3	2	1
18	私の指導者は、自慢ばかりしている	5	4	3	2	1
19	私の指導者は、戦術の話をよくしてくれる	5	4	3	2	1
20	私の指導者は、言っていることとやっていることが違う	5	4	3	2	1
21	私の指導者は、全ての選手に対して、何をすべきか、何をすべきでないかを説明する	5	4	3	2	1
22	私の指導者は、選手の考えを尊重している	5	4	3	2	1
23	私の指導者は、アドバイスが適切で分かりやすい	5	4	3	2	1
24	私の指導者は、神経質である	5	4	3	2	1
25	私の指導者は、サッカーの技術のレベルが高い	5	4	3	2	1
26	私の指導者は、意味のある失敗を認めてくれる	5	4	3	2	1
27	私の指導者は、怒る選手を決めている	5	4	3	2	1
28	私の指導者は、どんな状況におかれても何をすべきかを各選手に明確な指示を出す	5	4	3	2	1
29	私の指導者は、部員全員に自分の考えを判りやすく伝える	5	4	3	2	1
30	私の指導者は、チームの明確な目標を示す	5	4	3	2	1
31	私の指導者は、練習で生じた問題については、指導者自ら新しい解決策を示す	5	4	3	2	1
32	私の指導者は、その日の気分によって態度を変える	5	4	3	2	1
33	私の指導者は、サッカーの専門用語を正しく使う	5	4	3	2	1
34	私の指導者は、選手一人一人をよく観察してくれる	5	4	3	2	1
35	私の指導者は、サッカーだけでなく人間性も重視する	5	4	3	2	1
36	私の指導者は、今チームが何をするべきなのかを考えている	5	4	3	2	1
37	私の指導者は、選手の個人的な問題について手助けする	5	4	3	2	1
38	私の指導者は、チームにおける指導者の役割を選手全員に理解させている	5	4	3	2	1
39	私の指導者は、練習時間を工夫している	5	4	3	2	1
40	私の指導者は、チーム内の気まずい雰囲気を解きほぐす	5	4	3	2	1
41	私の指導者は、計画性のあるトレーニングを行っている	5	4	3	2	1
42	私の指導者は、練習の種類をたくさん持っている	5	4	3	2	1
43	私の指導者は、新しいことをする前には選手たちの賛成を得る	5	4	3	2	1

資料 1-2

고교당시의 소속팀	고교・클럽팀	남・여	현재의 나이	세	
고교당시의 최고성적	전국대회8강이상/ 전국대회진출/ 시,도대회8강이상/ 시,도대회진출/ 그 외				
최고성적 때의 자신의상황	선발멤바/ 후보/ 시합출장못함	그 당시의 경기 년수	년		
고교당시의 지도자연령	20대이하/ 30대/ 40대/ 50대/ 60대이상				
당시의 팀의 선수규모	15명이하/ 16명~30명/ 31명~50명/ 51명~80명/ 81명이상				

◆고교시대의 지도자의 생각을 떠올려서,이하의질문에 답해주세요.

★ 이설문지는 무기명이니까 솔직하게 답해주세요.
★ 질문은 5단계로 답해주세요. (처음의 3 문제는、3 선택입니다。해당하는 것에○해주세요。)
★ 너무 생각하지말고, 대강의 느낌으로 빨리 답해주세요.

1	나는、고교시대의 지도자를	매우 존경하고있다.	존경하고있다.	전혀 존경하지 않는다.	
2	나는、고교시대의 지도자를	매우 좋아한다.	좋아한다.	전혀 좋아하지 않는다.	
3	나는、고교시대의 지도자가	매우 무서웠다.	무서웠다.	전혀 무섭지 않았다.	

		반듯이그렇다.		어느쪽도아니다.		그렇지않다.
4	나의 지도자는, 트레이닝 시작할때 선수들에게 테마를 전해준다.	5	4	3	2	1
5	나의 지도자는, 연습중,또는 시합중에 화만 낸다.	5	4	3	2	1
6	나의 지도자는, 트레이닝의 하는 방법,요령등을 가르쳐준다.	5	4	3	2	1
7	나의 지도자는, 선수 한명,한명에 대해 기술과전술등의 지도를 한다.	5	4	3	2	1
8	나의 지도자는, 몸 짓 ,손 짓등을 하며 몸전체로 지도한다.	5	4	3	2	1
9	나의 지도자는, 선수보다 잘한다.	5	4	3	2	1
10	나의 지도자는, 그 선수를 좋아하는지 싫어하는지에 따라 멤바를 결정한다.	5	4	3	2	1
11	나의 지도자는, 훈련을 여러가지로 궁리한다.	5	4	3	2	1
12	나의 지도자는, 연습의 시범장면에 있어서,자신이 직접 보여준다.	5	4	3	2	1
13	나의 지도자는, 연습중에 하나하나 정성껏 지도한다.	5	4	3	2	1
14	나의 지도자는, 새로운 아이디어를 시도한다.	5	4	3	2	1
15	나의 지도자는, 지도상에 중요한 문제에 대해 선수의 의견을 구한다.	5	4	3	2	1
16	나의 지도자는, 시합의 반성점을 명확하게 가르쳐준다.	5	4	3	2	1
17	나의 지도자는, 선수의 장래를 제일로 생각한다.	5	4	3	2	1
18	나의 지도자는, 자기 자랑만 한다	5	4	3	2	1
19	나의 지도자는, 전술에대해서 설명을 잘 해준다.	5	4	3	2	1
20	나의 지도자는, 말과 행동이 다르다.	5	4	3	2	1
21	나의 지도자는, 전 선수에 대해서 무엇을 해야하는지,하면 안되는지를 설명 해준다.	5	4	3	2	1
22	나의 지도자는, 선수의 생각을 존중해 준다.	5	4	3	2	1
23	나의 지도자는, 어드바이스가 적절하고, 알기쉽다.	5	4	3	2	1
24	나의 지도자는, 신경질적이다.	5	4	3	2	1
25	나의 지도자는, 축구 기술의 레벨이 높다.	5	4	3	2	1
26	나의 지도자는, 의미있는 실수는 인정해준다.	5	4	3	2	1
27	나의 지도자는, 화내는 선수가 결정되어 있다.	5	4	3	2	1
28	나의 지도자는, 어떤 상황에서도 무엇을 해야만 하는지 각 선수에게 명확히 지시한다.	5	4	3	2	1
29	나의 지도자는, 선수 전원에게 자신의 생각을 알기쉽게 전달해준다.	5	4	3	2	1
30	나의 지도자는, 팀의 목표를 명확하게 가리킨다.	5	4	3	2	1
31	나의 지도자는, 훈련중 발생한 문제에대해 지도자 자신부터 새로운 해결책을 낸다.	5	4	3	2	1
32	나의 지도자는, 그 날에 기분에 따라 태도가 변한다.	5	4	3	2	1
33	나의 지도자는, 축구 전문용어를 정확히 사용하고 있다.	5	4	3	2	1
34	나의 지도자는, 선수 한명한명을 잘 관찰 해준다.	5	4	3	2	1
35	나의 지도자는, 축구뿐만 아니라,인간성도 중요시 한다.	5	4	3	2	1
36	나의 지도자는, 지금 팀이 무엇을 해야만하는지를 생각하고있다.	5	4	3	2	1
37	나의 지도자는, 선수의 개인적인 문제가 있으면 그것을 도와준다.	5	4	3	2	1
38	나의 지도자는, 팀에 있어서의 지도자의 역할을 선수전원에게 이해시키고있다.	5	4	3	2	1
39	나의 지도자는, 훈련시간을 여러가지로 생각하고 있다.	5	4	3	2	1
40	나의 지도자는, 팀내의 어색한 분위기를 해결해준다.	5	4	3	2	1
41	나의 지도자는, 계획성있는 훈련을 하고 있다.	5	4	3	2	1
42	나의 지도자는, 훈련 프로그램을 많이 알고 있다.	5	4	3	2	1
43	나의 지도자는, 새로운 일을 하기전에는 선수들의 찬성을 얻는다.	5	4	3	2	1